

文

浅田次郎

画

川上和生



マルシェの夢

夜

ごと夢を見る。

しかもたいそう面白く、かつリアルな夢である。夜ごと、というからにはつまり毎晩のことで、この習性はみなさん同じかと思つたらどうやらそうではなく、夢は見たり見なかつたり、なかにはまったく見ない人もいるらしい。

私の場合、夜ごとの夢はほとんど人生の一部であるから、本稿にも何度か書いている。のみならずいくつかの小説は夢の脚色である。実に助かる。筆が進まぬときはただ眠ればよい。

このごろは夜中にしばしばトイレ通いをしななければならぬが、熟練の夢職人にとってはテレビドラマのCMみたいなもので、スツキリしたあとはきちんと続きを見る。ときにはドラマの尺稼ぎのように、ちょっと戻つてから再スタートという場合もある。まさに職人芸である。

そのうえ加齢とともに午睡という贅沢な習慣が生じ、あつたりまえだが昼寝は浅いのでより面白くかつリアルな夢を見る。もはや私の生活は夢づくめと言つてよからう。

そもそも私の母という人が夢見女であつた。めつぼうな美人であるうえ、一年中クリスマスみたいな性格の彼女は、毎朝起きると必ず倅を捉まえて昨夜の夢を細密に語つて聞かせた。たとえ教育上好もしくない内容であつてもお構いなしであつた。しかるのち、倅も昨夜の夢で応酬したのである。その様子を見て、ほかの家族や同居人は呆れていた。そりゃそうだ。朝飯を食いながら夢物語のやりとりをする親子などそうはおるまい。で、この倅は長じて小説家になつたのだが、もしかしたら毎朝の奇妙な習慣のもたらした必然の結果なのかも

つばさよ
つばさ

第 245 回

しれぬ。

ドリームメーカーの資質は母から私に、そして私から娘へと相続された。

つまり、かつての母と同様に、私は寝ぼけまなこの娘を捉まえるなり昨夜の夢を語り、フムフムと聞いたあとかわつて娘が語り始める。物心ついたころからの習いであるから、朝のあいさつのようなものであつた。母がわが家に泊まつた翌朝などは、

親子三代三ツ巴の夢物語という抜き差しならぬ局面もあつた。

先日、娘婿がしみじみと言つた。

「あのう、おとうさんも毎晩夢を見るんですか？」

聞くところによると、娘は朝つばらから滔々と昨夜見た夢の話をするらしい。それがどうにもつまらないのだと婿は嘆いた。

「え、どうして。もしかしておまえら、うまくいつてねえのか」

などと気を揉めば、実直な婿は言下に否定してこう言つた。

「実は、夢を見たことがなくつて……」

なるほど。夢を知らぬ人が夢の話聞かされるのはたまらぬであろう。何がつまらないと言つたつて、これほど無意味で不毛な、かつ非生産的でクソの役にも立たぬ題材はあるまい。それを一方的に聞かされている婿は気の毒であつた。

しかし考えてみれば、母が亡くなり娘も家を出たのちは、毎朝夢の話聞かされている家人も同じ立場なのである。いやあ、気の毒だ。どうりで無感動に聞き流していると思つたら、そういうことであつたか。



しばしば市場の夢を見る。

ヨーロッパのマルシェであったり、中国の商場ショッピングセンターであったり、きらびやかなアラビアのバザールであったり、人と物がひしめき合うアジアマーケットだったりさまざまであるが、そうした異国の市場をあてどなくさまざま夢である。

夢の中の私はいつも心ときめいて、目も耳も鼻も口も間に合わぬほど高揚している。子供に返っているのである。

現実の私は、旅に出れば国の内外にかかわらず必ず地元市場を訪ねる。観光客のための場所ではなく、あくまで地元の人々が通う市場である。どんな名所旧蹟きこうせきを訪ねるよりも、市場はその土地の文化と生活を教えてくれる。背うないておられる読者も多々おいでになるはずだが、未経験の方にはぜひお勧めする。

むしろ海外旅行に限った話ではない。むしろ日本国内は地勢や気候や、長い藩政時代の地方分権制によって、物産にもそれぞれの個性がある。おそらく、世界一面白い市場は日本であろうと思う。ただし働き者でセツカチな国民性を反映して、多くの場合は「朝市」である。昼日中まで開いている市場は観光客向きであるから、「その土地の文化と生活」とは言い切れまい。



の中の私は、夜ごと市場をさまよう。どこの国のどの町の町とも知れぬ、果てもなく広い市場である。

あたりはほの暗く、そのぶん店先の灯あかりはまばゆく、足元はぬかるんでいる。意味のわからぬ声こゑが飛びかい、私は胸はずませて歩む。

はて、この夢を夜ごと見るのはどうしたことであろう。たしかに旅先で市場を訪ねるのは私の習慣だが、夜ごと夢に見るほどの執着があるわけでもない。

第245回 マルシェの夢





だとすると、潜在意識の中にある幼児体験によるのか、と思
い当たった。たしかに夢の中の私は少年のようであるし、誰か
に手を引かれているような気もする。そこで思い当たった。

幼いころ、祖母に連れられて夕餉の買物に行った。家庭に冷
蔵庫のなかった時代には、その晩に食べ切る食材を毎日買いに
出なければならなかった。

ビニール袋は存在しない。今日と同様に買物袋を提げてゆく。
いや、竹や麻を編んだ「買物籠」である。ビニールを始めとす
る化学製品がないから、食品を包むのは木を薄く削った経木
か古新聞であった。

そう、町には市場があった。小さな商店がみっしりと並ぶ、
子供の目には途方もなく広い市場である。

夕餉の買物袋は、祖母の手に握られていた。祖母は日本でも
さかんに買物袋が活躍していた。祖母は日本でも

幼い私は祖母に手を引かれて市場に通った。小学校三年のと
きに祖母が亡くなるまで、あだやおろそかにせぬ日課であつた。
そののちはひとりでも買物を言いつかり、それはすっかり習性
になって、今も譲らぬ私の仕事になっている。

しかし、ほどなく市場は姿を消して、アーケード付きの商店
街となり、やがてスーパーマーケットが出現した。その変化は
昭和四十年前後の、アツという間の出来事であった。

思うに幼い私が親しんだ市場は、空襲で焼け野原になった東
京に、とりあえず設けられたものだったのではあるまいか。だ
からどの町の市場も粗末なたたずまいで、商店街が現れスー
パーマーケットが開けば、その使命をおえて消えてしまった。

明治生まれの祖母は、関東大震災と戦災の二つの破滅を体験
した人であった。その祖母の悲しい昔語りとともに、市場も消
えてしまったように思える。

それでも夜ごと夢に見る市場は、パリのマルシエやアラビア
のバザールにもまして美しく輝かしく、私の胸はときめく。 **S**

浅田次郎



あさだ じろう / 作家。1951年、東京都に
生まれる。『鉄道員』（直木賞）、『壬生義
士伝』（柴田錬三郎賞）、『お腹召しませ』
（中央公論文芸賞・司馬遼太郎賞）、『中
原の虹』（吉川英治文学賞）、『終わらざる
夏』（毎日出版文化賞）、『帰郷』（大佛次
郎賞）など、多彩な作風で多くの読者を魅
了し続けている。2015年、紫綬褒章受章。
2019年、菊池寛賞受賞。近著は『母の待
つ里』。本連載をまとめた『つばさよつばさ』
『アイム・ファイン!』『バリわづらい 江戸わ
づらい』『竜宮城とセツさま』『見果てぬ花』
が好評発売中。

川上和生



かわかみ かずお / イラストレーター。1959
年北海道生まれ。デザイン会社勤務を経て
独立。個展、グループ展多数。現在、雑誌、
単行本の装丁、広告などで活動中。絵本
『ながいながい骨の旅』（文・松田素子）で
2019年度児童福祉文化賞受賞。東京イラ
ストレーターズンサエティ会員。